

移行期間にできることを考える

会津若松市立神指小学校
教頭 君 佳子
(平成 21 年度 修了生)

今年 4 月に、新任教頭として創立 130 周年を迎えた小学校に着任しました。職員室前の廊下には、歴代校長や P T A 会長、同窓会長の写真が掲示してあり、一世紀を超える伝統の重みを感じています。校庭がとても広く、磐梯山がきれいに見える学校です。学区には神指城跡があります。

新学習指導要領が全面実施となる 2020 年まで、あと 1 年余りとなりました。

現在、5 年生の外国語活動を担当していますが、移行期間の授業時数は最低 50 時間なので、旧外国語活動教材「Hi, Friends 1」と新教材「We Can 1」を見比べながら、内容の漏れがないように授業を進めています。指導体制は ALT との TT で行い、発音やイントネーション、文化理解の際は ALT が中心となって指導しています。子どもたちは、外国の生活に興味を持って聞くことができ、ALT に直接質問をして気づきを深められる点がよいと思います。子どもの耳はとてもよく、難しい単語でもイントネーションを真似して再現できる力があります。

市内の学校には、電子黒板が配当されているので、デジタル教材で進められる点は便利です。今後は、他学年のデジタル教材についても、どんな内容となっているか把握したいです。移行期間中の外国語活動の評価は子どもの良さを文章で書くこととなっています。一人一人の学びを捉えるために、評価のあり方についても工夫したいと思っています。単元を通してどんな力を身に付けさせたいか明らかにするとともに、どの時間にどんな観点で評価するかについて評価計画（評価方法や時期）を立てておくことも大切だと感じます。子どもの気づきを把握するためには、行動観察や作品だけでなく子ども自身の振り返りが大切だと感じます。授業のはじめに本時のねらいを提示し、振り返りで自分の言葉でまとめさせる活動は、今後も継続していきたいです。

移行期間にやっておきたいことを考えてみると、たくさんことがあります。子どもにとって取り組みたいと思う課題の設定（身近な暮らしや自分との関わり）、コミュニケーションの目的や場面・状況を明確にすること、言語材料の選択、文字や表現に関するワークシートの工夫、全体

計画の作成、年間指導計画の作成、CAN-DO リスト……。移行期間である今できることを、少しずつ行っていったらと思います。

私が学部生のときにシンガポール海外研修があり、すらすらと英語を話されていた院生さんがいて心強かったのを覚えています。その姿にあこがれ、自分も院生として学ぶ機会をいただきました。北條ゼミの一員として、幼稚園や附属小での出張授業と一緒に参加させていただき、学ぶことの多い2年間でした。丁寧に指導してくださる先生方や院生室と一緒に学んだ皆さんに支えられ、楽しく充実した学生生活を送ることができました。

大学院終了後、もうすぐ9年目を迎えようとしています。小学校英語が教科化されるまであと1年余り。子ども達に英語が通じた喜びや満足感を味わわせることができるよう、日々の授業を工夫していきたいです。忙しさの中にいると、なかなか英語に関する情報を得たり、英語を勉強したりする機会も少なくなってしまうと思います。主体的に学びに向かう姿を目指して努力していきたいです。

またいつか皆様にお会いできる日を楽しみにしています。今後ご指導よろしく願いいたします。

架け橋

妙高市立新井小学校

教諭 中村 岳

(平成26年度修了生)

前年度まで新潟県の中学校教員として勤務していましたが、今年度から小学校に異動になり、「小学校外国語専科」という役職をいただきました。現在は小学校4校を兼務して、高学年の外国語の授業を担当しています。最初は中学校と小学校のギャップに戸惑うことが多かったですが、小学校の先生方、そして子どもたちが自分を温かく受け入れてくださることに嬉しさを感じています。

2年後に新学習指導要領が完全実施となり、ちょうど今は移行期間となります。授業時数だけ見れば、高学年は昨年までは35時間、今年度は50時間、そして完全実施となる2年後は70時間となります。学習内容も高度化され、移行期間の時点で高学年は中学1年の後半に学習する「動詞の過去形」などを扱います。中学校教員を経験してきた自分として、子どもたちにできることは何だろうかと自問自答する毎日です。

先日、市内の教育研究会で公開授業を担当させていただきました。中学校の先生と打ち合わせをしながら授業をつくり、どのような観点で子どもたちの学びを繋げていくか、改めて深く考える機会になりました。

今回の授業づくりの足掛かりとなったのは、2018年9月28日に文部科学省 YouTube チャンネルで公開された動画です。動画内では、2020年に教科化を迎える小学校での外国語教育と中学校での英語教育との連携に向けて、「言語活動を重視した指導」では「演繹的指導・帰納的指導」という2つの言葉を用いています。文法の説明・練習を行った後に活動に取り組みせる演繹的な指導を行うのではなく、言語活動を通して文法への気付きを促した後に、文法の説明・練習を取り

組ませる帰納的な指導を重視していく必要があると提案しています。すなわち、機械的な練習をひたすら行って定着させるのではなく、あくまでも体験的な活動を通して子どもに言語への気付きを促すことが大切だということです。授業を実践していく中でも私は、たとえ子どもたちが言語活動の中で正しく言えなくても(聞き取れなくても)、「〇〇ってどうやって英語で言うんだろ。」「日本語とちょっと違うなあ。」と彼らの頭に浮かんでくる question をフォローしながら、意欲付けていくことに身を砕きました。

「小学校でここまでやるのなら、中学校での指導も変えていかななくてはならない。」と、参観された中学校の先生からコメントをいただきました。中学校教員だった自分としても、その通りだと思っています。小学校と中学校を繋ぐ架け橋になればと思い、日々研鑽を積みたいと思っています。

大学院入学から半年を経て

大学院 1 年 言語系教育実践コース(英語)
高山航太郎

秋の深まりが感じられる今日、上越では美しい落ち葉を楽しめる季節となりました。上越教育大学に入学し早くも7カ月が経とうとしています。わからないことが多く慌ただしかった前期も終わり、私たちの院生生活もこの秋の気候のように落ち着いてきたように感じております。

私は学部時代、経済学を専攻しており英語教育は全く足を踏み入れたことがない分野でした。見るもの聞くもの全てが新しく期待が大きかったのと同時に不安が大きかったのを今でも鮮明に覚えています。しかしながら、私が所属する英語コースには親身になって指導してくださる先生方や先輩方、同期がおり様々な背景を持った仲間たちと切磋琢磨しながら充実した日々を過ごしていると感じております。

現在私は長谷川先生のゼミに所属し、日々それぞれの研究について議論を深めています。私はアウトプットにおける気づき(noticing)を中心に研究を行っています。アウトプットにおける気づき(noticing)とは簡単に言えばライティングやスピーキングなどの際に自分が産出した中間言語と目標言語の違いや差に気づくことを指します。気づきは学習を促進させるものであるとされており、学校教育に生かせるものであります。私は気づきを促すアウトプット活動を実際の英語授業場面を意識に入れながら今後も研究していきたいと考えています。

主体的・対話的で深い学びが求められている現代では演繹的な指導だけでなく、活動を中心の授業が求められています。わたしが中学校・高校で受けてきた授業は教師が一方的に指導するものほとんどであったように思います。しかし活動をただ行えばいいというわけではありません。「活動あって学びなし」という状態に陥る危険性もあります。理論に基づいた意味のある活動が必要になり、また活動を効果的に行うには学級経営能力も大きくかかわってきます。またグローバル化に対応したコミュニケーション能力の育成に伴い、2020年には大学入試制度が変わり、学校教育は大きな変革の時を迎えていると言えます。これに伴い教師は今まで以上に高い能力が求められ、教師になるために学ばなければならないことは私が入学した当初考えていた以上に莫大で多難なものであります。これからのあと2年間この上越教育大学でできるだけ多く学んでいきたいと考えています。

院生だからこそ、出来ること

大学院 1 年 言語系教育実践コース（英語）

林 澤奇

晩冬の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。皆さんいかがお過ごしでしょうか。上越生活を始めて半年以上が過ぎようとしています。私は長谷川佑介先生のゼミに所属して、主に英語教育と第二言語習得を学んでいます。私はこの大学院に入学する前から語彙習得に興味がありました。文部科学省が発表した新指導要領では既存の学習内容からいくつか変更点が加えられました。その変更点のうちの一つに学習単語量の増加があります。語彙習得は欠かせません。語彙習得をしないという事は、言語習得をしないと言っているようなものです。そして、その大切な学習行動は多くの学習者が英語嫌いや苦手になるほどのものでもあります。実際の調査でも語彙習得に中高生を対象にした英語に対する意識調査などで、多くの人が単語を覚える事が苦手だと答えたという結果が出ている調査も多くあります。そんな語彙習得についての研究をする事は語彙習得において大きな影響を与えうる分野の一つだと私は自信を持って言えます。

その語彙習得でも特に「多義語」について研究を進めています。英単語のほとんどは多義性を孕んでいます。基本的に固有名詞でなければ、1つの語に1つ以上の意味があります。1つの単語が多義性を孕むようになった経緯は様々です。その複数の意味の間に近接性があるかどうかもまた様々です。「○○○っていう単語はこんな意味もあるのか！」とびっくりした経験はありませんか。この単語の多義性は第二言語習得の困難要因の1つであると言われていています。この多義語の意味の近接性を軸にして、私は来年に研究会発表と論文投稿をする事を目指して準備をしています。

私自身、これまでの英語学習経験の中で“単語を覚える”という事が一番辛く、とても苦労しました。そのせいでテストの点数は見るに耐えないものでした。そうなるのも当然です。言葉を知らなければ自分の考えを相手に伝える事は難しく、相手の気持ちを汲み取る事も出来ません。せつかく習った文法事項でも、単語を知らなければ役に立ちません。言語において単語は人間という心臓のようなものだと思えます。そこで語彙習得の分野で何か発見をして教育現場に活かしたら自分のように苦しむ人が減るかもしれない、減ってほしいという想いがあり日々の研究の励みとして常に心に留めています。ただの院生が何か大きな力になる事は難しいと思えます。しかし、私は常に“自分は微力かもしれないが、決して無力ではない”と思っています。自分の苦労した経験や挫折が基となって、誰かの役に立つのであれば、自分の苦労した経験のすべてが報われ、意味のある経験だったとどうか思えるように院生だからこそできる研究に真摯にひたむきに励んでいきたいです。



国際理解教育のエッセンスを生かした外国語活動を

大学院 1 年 言語系教育実践コース（英語）

坂口和代（上越市立安塚小学校在籍）

私は小学校教諭として 20 年以上新潟県で勤務してきました。今年度から大学院で学ぶという貴重な機会をいただき、教員生活のちょうど折り返しのこの時期にじっくりと考える時間をもてたことをありがたく思っています。

私が英語を再度勉強し始めたのは、教員になってからです。異文化への興味から、これまで様々な国に出かけ、外国の友人が何人もできました。すると英語をもっと磨いて自分の気持ちを自分の言葉で伝えたい、相手の言葉や内容をもっと理解したいと思うようになり、英語だけではなく、スペイン語やロシア語も学んだりしました。

教師になりたての頃、小学校では「総合的な学習の時間」が創設され、子どもたちの実態と地域の課題に合わせて探求学習を行うことが求められていました。今も自分の原点となっている忘れられない国際理解教育の実践がいくつかあります。直江津に勤務した際には、直江津港に停泊する外国船を訪問し船員と交流を繰り返し、異文化に触れる体験を楽しみました。すると、地域住民と外国人船員との軋轢に気づき、国際交流のかけはしになるための活動を 3 年間にわたって行いました。また、地域の平和記念公園をきっかけに、戦時中、直江津にあった捕虜収容所で過ごしたオーストラリア人の元捕虜の方々と上越市との交流や歴史について学習をしたこともありました。学習は、友好都市カウラの中学生との文通やビデオレター交換、プレゼント交換などの交流に発展しました。これらの活動を通して、小学生段階の子どもたちの柔軟な心は、国籍や文化の違いを柔軟に受け止め、違いを魅力として感じることを再認識しました。

近年、総合的な学習の時間はどんどん削られ、以前のようなダイナミックな活動をすることは困難になってきました。しかし、これから本格化してくる外国語活動、外国語科において、国際理解教育のエッセンスを生かしながら活動していくことは十分可能ではないかと考えています。異文化に触れる楽しさ、自分の文化の魅力を再認識し、他の国の人に伝えていく楽しさを、英語教育を通して子どもたちに味わわせることができれば、それは言語学習の大きなモチベーションとなりうると考えています。

その可能性の一つとして、近年注目されつつある CLIL（内容言語統合型学習）があげられます。CLIL の授業は、4 つの C を大切に、異文化に触れる本物の活動を協働的に行っていくことを通して、国際感覚や英語が自然に身に付けられるような授業設計ができることも目指しています。今年度は、大学院の実践場面分析演習の授業で CLIL の理論的背景と実践提案を行いました。チョコレート材料であるカカオ生産の裏に隠された児童労働について知り、改善のために何ができるかを話し合う活動を提案し、課題は多いが意義は大きいとの意見をもらいました。CLIL 授業は教材準備が大変ですが、知的好奇心が高まっていく小学校高学年にこそ、ぜひこのような思考を伴う活動を十分経験させたいと改めて思いました。現在修士論文のテーマはまだ絞り切れていませんが、現場に戻った時に子どもたちに本当に力がつく授業ができるように、今後さらにしっかりと理論を学び、実践力も高めていきたいと考えています。

研究室の窓から



清泉女学院短期大学 教授
中村洋一（平成4年度修了生）

連載第8回

アクティブ・ラーニングとネガティブ・ケイパビリティ

トランプ米大統領の暴露本の第一弾を読んできた。正直、意味がよくわからない単語や表現がたくさんある。たとえば、46ページの anti-wonk, counterexpert, gut call は、なんとなく分かるような、分からないような ...。高校時代の思い出にと思って机の上の本立てに置いてある、1972年発行の *POD* に、そういう単語のエントリーはなかった。

p. 46.

While the advantages of this style for the Trump team were now very clear, the problem was that it often – in fact regularly – produced assertions that were not remotely true.

This had led increasingly to the two-different-realities theory of Trump politics. In the one reality, which encompassed most of Trump’s supporters, his nature was understood and appreciated. He was the anti-wonk. He was the counterexpert. His was the gut call. He was the everyman. He was jazz (some, in the telling, made it rap), everybody else an earnest folk music. In the other reality, in which resided most of his antagonists, his virtues were grievous if not mental and criminal flaws. In this reality lived the media, which, with its conclusion of a misbegotten and bastard presidency, believed it could diminish him and wound him (and wind him up) and rob him of all credibility by relentlessly pointing out how literally wrong he was. (下線、波線筆者)。

で、波線をつけた He was jazz (some, in the telling, made it rap), everybody else an earnest folk music. の言いたいことが、これまた良く分からない。「トランプはジャズだった」?、everybody else an earnest folk music は、was が省略されていて、‘everybody else was an earnest folk music’? だとしたら、「他の者達はみな真剣なフォークミュージック」? 省略を修士論文に書いた長女に聞いてみると、その位置の was しか可能性がないんじゃないの、と言う。カナダ出身の元同僚に聞くと、jazz の metonymy が何を意味するのかわからない、folk music も...との答え。

anti-wonk は、反-ガリ勉か?、counterexpert は、非専門家? gut call は、内臓からの叫び? と仮説を立てて、中学校の時の訳読のように、「トランプはジャズだった（ラップにする、という人もいる）、他の人は真剣なフォークミュージックだった」と日本語に直してみても、「トランプは、支持者達にとっては、自分たちと同じようにジャズが分かる男だった（ご機嫌なラップさ、というやつもいる）、反対にトランプ以外のやつらは、コテコテのフォークミュージックしかわからない堅物さ」などと解釈してみる。「この解釈はどう?」、就職してからも TOEIC の勉強を続けている三女に聞いてみると、「そう言われるとそういうことかなあ」、という答え。

夏の終わりに、兵庫県篠山であった、107 Song Book Camp というフォークソングの集まりで、jazz と earnest folk music の部分を紹介し、「でも、ボクたちは、コテコテのフォーク・ミュージックの人たちで、良かったですよねぇ」などと話してみたが、「なんだか良く分からないけど、良かったかも ...」という微妙な反応。

結局、もやもやして、自信が持てずに、くやしいけれど、こっそりと、日本語訳をポチる。

pp. 87 – 88

このスタイルがトランプ陣営にとって有利に働いたことは明らかだが、一方で別の問題も生んでいた。ひとかけらも事実にもとづかない発言が、しばしば（というより絶え間なく）飛び出していたのである。

このことから導き出されたのが、“二つの（異なる）現実” というトランプ政治の理論だ。一方は、トランプの支持者の大半を取り込んだ現実で、そこではトランプの人となりは理解され、支持されている。トランプはガリ勉政治家や頭でっかちの専門家とは正反対の、直感でものを考える男だ。彼は普通の人間だ。いわば、トランプはジャズ（ラップと表現する人もいる）であり、ほかのみんなはまじめくさった民族音楽だ。もう一方は、反対派の大半が生きる現実で、そこではトランプの道德観念は、精神的・犯罪的欠陥を抱えているとまではいわないまでも、嘆かわしいものだとしてされている。こちらの現実には、トランプをできそこないやろくでなしの大統領と決めつけて、彼がいかに間違ったことを発言したかを情け容赦なく指摘することで、トランプを貶め、（致命的に）傷つけ、彼の信用をことごとく奪うことができると信じているメディアも含まれる。

おおっ、当たらずとも遠からずだったかと安心した。しかし、American Folk Song に引きつけられて 50 有余年、今では「アメリカン・フォークソングの世界: 人々は何を想って、唄ってきたか」などという話を、シニア大学の講座なんかで、大きい声で話してしまう自分からすると、jazz がそういうメトニミーで、folk music がそういうことかあ、と複雑な気もする。それにしても、言葉は生きている、しかも、ものすごく速いスピードで変化していることを実感する。言葉の意味を正確に捉えるには、とんでもなく幅広い言語世界が必要になる。英語の勉強を始めてからもう半世紀も経過しているのに、知らないことばかりで、新たに学ばなければならないことがかえって増えている。嗚呼、英語はいつまでたっても難しい。

新学習指導要領で強調されている「主体的・対話的で深い学び」については、当初“Active Learning” という用語が使用されていた。しかし、その意味するところの曖昧さが指摘され、「主

体的・対話的で深い学び(いわゆるアクティブ・ラーニング)」という表現を経て、「主体的・対話的で深い学び」に定着したと理解している。そして、学習指導要領やその解説書を読む限りにおいては、「主体的・対話的で深い学び」を方法論として捉えているかに読める。曖昧さゆえに使用が避けられた「アクティブ・ラーニング」だが、その曖昧さの中に、方法論を越え、むしろ目的論とも言える概念が含まれているのではないかと考え始めている。

「研究室の窓から」の第6回目にもアクティブ・ラーニングに触れ、先生が「教える」というベクトルから、「児童・生徒が学ぶ」ことを促進するというベクトルへの転換、特に「教える」側の心理的転換が、ひとつの鍵となるのではないかと書いた。昨今では、勤務している短期大学のカリキュラムやシラバスでも、「アクティブ・ラーニングを取り入れた ... 」という表現が要求され始めている。アクティブ・ラーニングって、本当は何なんだろうと疑問を持ちながら、文献などを読んでみると、アクティブ・ラーニングでも、エキスパートと呼ばれる、「教える人」が必要であるらしい。で、その「教える人」が同じく学ぶ者達の中にいるということか ... 。センセイとして、教えなくてもいいのか、ああ、それはありがたい、などと思ってしまう。もしかしたら小学校の英語教育も、センセイが児童にALTをまねた発音の仕方を教えてもらうこともあるというベクトルの転換で、何か展開が開けるのではないだろうか、などと漠然と考えてしまう。

英語学概論の授業で、「言葉の変化」について講義し、爆睡一步手前の学生達に、「最近の若者ことばってどんなのあるかなあ?」と尋ねてみる。「あげぼよ、ってどんな意味?」「まじまんじ、って、ワケ分からないんですけど」と呼び水を打つと、「やばたん」とか、「イケボ」とかを解説してくれる発言があり、予想以上の、異様な盛り上がりを見せたりする。「ありよりのあり」と「なしよりのあり」の説明を聞いた時は、ストーンと納得してしまった。気を取り直してテキストに戻り、「ソシュールの言うように、言語の共時態の研究はとても大切です」とまとめる授業も、少なくとも、なしよりのあり、だと言ってもいいんじゃないかと思ったりする。

アクティブ・ラーニングのプロセスでは、答えを急ぐ必要はないのではないかと思う。むしろ、極端に言えば「答えは不要」なのではないかとも思う。また、アクティブ・ラーニングは、方法論に留まるものではなく、「目的そのもの」ではないかと考え始めている。「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということが、アクティブ・ラーニングの中心にあるのではないか。だとすると、アクティブ・ラーニングは、「生涯にわたって、積極的に何かを知ろうとする力」そのものと解釈することも出来るのではないだろうか。方法論でもあるが、「学習者が主体的・対話的に、深く学ぶことができる力」そのものを身につけることが目的であるからである。だから、センセイが答えを教え、学ぶ側がそこで思考を止めてしまうことの繰り返しだったら、それはアクティブ・ラーニングの対局にある、危ないことなのではないか、とも思う。だいたい、センセイが教えようとしている「答え」は、本当に「正しい答え」なのだろうか?

教える側と学ぶ側、先生と生徒の関係を思う時、思い浮かぶ場面がいくつかある。

三波春夫さんという歌手がいた。昭和38年に『東京五輪音頭』で「オリンピックの顔と顔 ...」と唄ってヒットも飛ばしたが、歌謡浪曲というジャンルで大活躍した。「お客様は神様です」ともおっしゃった三波春夫さんが演ずる、忠臣蔵の『俵屋玄蕃』という演目がある。赤穂四十七士の

ひとり、杉野十平次が夜泣きそば屋に身を躰し、主君の敵を討つ機を伺っている時に、俵星玄蕃という槍の名手とそのそば屋の常連客となる。俵星は、そば屋が赤穂四十七士のひとりだと気づきながら、杉野の名を正すことなく、俵崩しの一手という槍の極意を密かに教える。討ち入り当日、俵星は、討ち入りの手助けをすべく松坂町の吉良上野介の屋敷へ向かう。そこへ、ひとりの若い赤穂浪士が、「雪を蹴立てて、さあくっ、さあくっ、さあくっ」と、近寄り「センセイ!」と呼びかける。俵星玄蕃は「おお、そば屋かあ!」と応え「命惜しむな、名をこそ惜しめ」と伝える。赤穂四十七士をまとめる大石内蔵助は助太刀を断り、俵星は討ち入りに加わることはなかったが、赤穂四十七士が討ち入りを果たすまで、邪魔するものあればそれを止めるべくと言って両国橋で仁王立ちになる、という演目である。しかし、邪魔するものはいなかったようである。センセイは、役に立たなかったのか? いや、そば屋は確かに、感謝と信頼の気持ちを示しながら「雪を蹴立てて、さあくっ、さあくっ、さあくっ」と近寄り、「センセイ!」と呼びかけたのである。

An Officer and a Gentleman (『愛と青春の旅立ち』)という映画にも、いい場面がある。リチャード・ギアの演じたザック・メイヨが、海軍兵学校に入学し、訓練を進める中で、悲惨な生育歴のゆえに、それまで信じなかった友情とか、愛といった人間的な感情を取り戻していく物語である。兵学校の鬼教官フォーリー軍曹をルイス・ゴセット・ジュニアという役者が演じた。狡猾な規律違反がバレて、休日にもかかわらず、強烈なしごきとも思える懲罰的訓練をしているザックとフォーリー軍曹にむかって、ボート遊びをしている仲間とガールフレンド達が、ズボンと下着を下げてお尻を出してからかっている場面が面白い。お尻を露出してからかう行為は mooning と言って、抗議・いたずら・嫌がらせのために行われるらしい。この場面で、ザックは友情を知り、鬼教官もまたザックを理解し始める。様々なアクシデントを乗り越え、訓練を終了したセレモニーの最後、訓練生達は、鬼教官の“Class, 1-5-8-1. Fall out!”のかけ声で帽子を投げ上げ、その後、クラスの証であるバッジをフォーリーに返しに行く。反目し合い、時にはケンカのようなマーシャル・アーツの闘いなどを経てきた二人は、訓練が終わって、組織上の関係が逆転した。ザック・メイヨは訓練を終えて少尉(ensign)になり、フォーリー軍曹(sergeant)より階級が上になったのだ。

Foley: Congratulations, Ensign Mayo.

Mayo: I will never forget you, Sergeant.

Foley: I know.

Mayo: I wouldn't have made this, if it weren't for you.

Foley: Get the hell out of here.

「君のお陰で卒業を」と告げると、泣き出しそうな、しかし精一杯のしかめっ面で「早く行け」と答えたフォーリー軍曹に、かつては mayonnaise などと罵られていたザックが “Thank you, Sergeant” と伝える。センセイは、軍の組織で言えば、もはや下の階級の人となった。ザックはフォーリー軍曹をやっつけたのか? いや、ザック・メイヨは確かに感謝と信頼の気持ちを示しながらセンセイに「君のことは忘れない」と言ったのである。

ふたつの場面とも、諍い事や軍隊に関わるストーリーで、そのことは差し引いて考えるべきであるが、しかし、両方とも、センセイは何か答えを与えているわけではないのに、「教える側」と「学ぶ側」双方に、信頼とか感謝といった暖かい関係が生まれ、学ぶ者もセンセイも、確かに何かを学んでいる。

帚木(2017)に、ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)とは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」、あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」との定義がある (p. 3)。この本の中に、日本芸術院長も務められた黒井千次氏の言葉が引用されている。「謎や問には、簡単に答えが与えられぬほうがよいのではないかと。不明のまま抱いていた謎は、それを抱く人の体温によって成長、成熟し、さらに豊かな謎へと育っていくのではあるまいか。そして、場合によっては、一段と深みを増した謎は、底の浅い答えよりも遥かに貴重なものをうちに宿しているような気がしてならない」(p. 77)。「簡単に与えられる答え」「底の浅い答え」と読んで、うなだれてしまった。さらに、「解決できない問題があっても、じっくり耐えて、熟慮するのが教養でしょう。そうすると、今日の学校での教育がどこか教育の本質から逸脱しているのが分かります。」(p. 188)という指摘も耳が痛いだけでなく、胸まで痛む。

英語の授業はどうだろう。「どうしたら英語ができるようになりますか」という単純そうに見える質問に、未だにスパッと答えることができていない。なさけないけれど、「どうしたもんかなあ。まず、単純作業だけど、書写と音読から始めてみたらどうだろう」なんて言ってみたりする。「人差し指に鉛筆だこができるまで書き写して、頬っぺたの筋肉が疲れるまで音読し続ければ、そのうちに、何か見えてくるんじゃないかなあ」なんて、無責任極まりない。しかし、修士論文の先が見えず、苦しい戦いをしていた時の体験から言えば、勉強の途中に「何か見えてくる時」は、ぼんやりしてはいるけれど、確かにあったような気がする。なんだかよくわからないけれど、文献をがむしゃらに読み、ほぼ的外れの議論に飽きて、院生室の窓の外の紅葉をぼんやり眺めていた時に、「ああ、あの1行に書いてあったことは、そういうことだったかあ」と、唐突に闇が開けたような気がしたこともあった。修士論文では、PienemannのDevelopmental Stagesを検討した。Pienemannの研究は、Teachability – Learnabilityの考察を経てProcessability Theoryへと繋がっている。Learnabilityについて読んだことを考えながら、緑と赤と黄色の葉っぱが混ざる窓の外を見て、「そうかあ、中間言語と学習可能性かあ」と思い付いたのだったと思う。今、気がついたけれど、紅葉途中の景色は、母集団を想定してパラメータを推定する項目応答理論の説明に、たとえとして使うことができるかも知れない…。

英語の授業とアクティブ・ラーニングを関連付けることには、大きな可能性があるのではないと思う。英語のスキルを身に着けるには訓練が欠かせない。限られた言語知識を適用して、五里霧中の試行錯誤を繰り返し、中間言語の段階を通り過ぎていくことが不可欠である。そういう意味では、Don't be afraid of making mistakes.という助言は片手落ちではないだろうか。誤りを繰り返す中間言語を経由しなければ、目標言語の獲得に近づかないとしたら、Be afraid of the idea of making no mistake in learning English.ではないのか。まさに、中間言語の誤りを繰り返す段階にいる時、「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」が必要なのではないか。ネガティブ・ケイパビリティを持つことにより、中間言語の次の段階へ進む学習を継続する動機が維持されるのではないだろうか。それは、アクティブ・ラーニングの授業の中で、育むことができる力なのではないだろうか。

授業だけでなく、絶え間なく続きそうにも見える様々な課題に取り組む学校現場では、すぐに答えが出ない課題も多い。底の浅い答えでより深みにはまってしまう現実もある。教育に携わるものの端くれとして、耐えて熟慮する力、ネガティブ・ケイパビリティを持ちたいと思う。また、

自分自身がセンセイとして関わる生徒や学生に、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」は重要なんだよと伝え、そのように行動する力を育てていきたい。

平成の時代は最後の日々を迎えている。これからやって来る 10 年後、20 年後、いや、もっと短いスパンであっても、センセイとしての私は、胸を張って正しいと言える未来の予測を持ち得ない。日進月歩の技術革新、窮屈さを増す世界経済、緊張感の絶えないグローバル社会、どれをとっても、先行きの予測が不可能で、それを乗り越えるための正しい答えなどどこにも見当たらない。ただ、そうした時代に生きる人たちに、どうしたら、困難を乗り越えていけるだろうかと考える力と方法は、なんとか伝えたい。それ自体も、自分自身が答えを見つけられるものではないが、目的としてのアクティブ・ラーニングの場を設定することで、少しは、力になれるのではないか、また、自分自身も得るものが大きいのではないか、これは、やはり、ありよりのありではないか、と思ったりしている。

参考文献

- Baepler, P., J. D. Walker., D. C. Brooks., K. Saichaie. & C. I. Petersen. (2016). *A guide to teaching in the active learning classroom: history, research, and practice*. Stylus.
- Fowler, F. G. & Fowler, H. W. (compiled). (1972). *The pocket Oxford dictionary of current English*. (Fifth Edition, Third Japanese impression). OUP.
- Wolfe, M. (2018). *Fire and fury: Inside the Trump White House*. Little Brown.
- 関根光宏・藤田美菜子. (2018). 『炎と怒り：トランプ政権の内幕』. 早川書房.
- 帯木蓬生. (2017). 『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』. 朝日新聞出版.

編集後記

今年は暖冬と言われていましたが、クリスマスが近づくと流石に冬の寒さが身に沁みます。上越教育大学大学院に内地留学していた頃、学部・大学院合同のシンガポール研修に参加する機会がありましたが、その折にご一緒した君先生が既に教頭先生になられていることに時の流れを感じています。編集作業を通じて、皆様の原稿を拝読していますが、修了生の皆さまが各地の勤務校における教育に対して、熱心かつ理論的に取り組んでおられるご様子を感じ、自分の授業や研究の在り方を省みる良い機会をいただいております。

(編集委員 H.I.)



2018年12月17日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子 (上越教育大学)

野地美幸 (上越教育大学)

飯島博之 (埼玉県立大学)
